



メディアセンター / Gates MC

あることも感じられる。作品を作れば人に見てもらいたい、評価されたいという欲求、そして売りたいという願望も生まれるのが人間である。つまり作品発表の場を求める人が増えている。そして作品購入者側の今世紀の流れとしては、自宅に飾って楽しむ派と、モノの資産として購入する派の二手に分かれている。前者は比較的買いやしやすい価格の作品、知名度よりも好みに合った作品を選ぶ傾向にあり、後者は投機目的も伴い海外オークション等でも取引される話題の高額な現代アート作品などに興味

多くのアーティストや美術団体が、「美術館」での展示を望んでいることに着目してみたい。作品が数多く展示できる、200号クラスの大きい作品が展示できる、多くの人に見てもらえる、見栄えが良い、肩書にプラスになるなど、そこには様々な理由がある。借館ができる代表的な美術館としては1926年に開館した現在の東京都美術館があるが、日本は世界に類を見ないほど美術団体が多く、スペースの不足という不満を長年多くの美術団体が抗議として政府に唱え続け、

これを執筆している2020年12月現在もなお、世界的にこのウィルスの感染者数が増え続けており、ロックダウンと呼ばれる都市封鎖や外出制限がなされている海外の都市もある。美術館などでは展覧会を企画し作品を集めても、政府の指示により中止や延期になるリスクが伴い、そこには巨額の損失が生まれる。芸術に関わる業界やエンターテインメント界全体も「見えない出口」に翻弄され、様々な対応策に取り組んでいる。音楽や舞台のイベントは観て聴いてという受動的な体験がメインとなるので、ライブ動画などコンテンツの配信で楽しめる一方、静止しているアートは前述のオンラインビューイングやYouTubeなどから展覧会風景動画を鑑賞し、スクロールしながらホームページなどの静止画を観る静かな楽しみ方が主だ。しかしVR（ヴァーチャル・リアリティ）仮想現実）を利用すると、実際に訪れたような感覚で美術館やギャラリーの中を動くことができ、自分の意志で仮想空間内を動く事

は、PCやテレビの画面を使うゲームなどで慣れている人も多い。美術展のVRはWeb上で散見されていたが、これは館所有作品の常設展や企画展などの映像で展覧会主催側が作ったもの。一般のアーティストが参加して作品を展示できる貸画廊、貸美術館のようなものではない。専門的な商材のヴァーチャル見本市やヴァーチャルデパートなども既に登場しているが、今後は美術界においても展示場所をWeb上で借用する、あるいは主催側によるVRでの展覧会やアートフェア開催の実現増加は、時代の流れで避けて通れないだろう。そしてコロナ収束後もVRとリアルとの共存が必要となるはずだ。

### アーティストは増えている

この10年ほどは、団塊の世代（第一次ベビーブームで人口が多い1947〜1949年生まれ）が定年退職で画家などに転向し、アーティスト人口が増えて



アートストア / Gates AS

を持つ。前者の視点で考えると、気に入ったアーティストの経歴などは重視せず感性が合えば作品を購入する。つまり自分の価値観でアートを選ぶ人が増えている時代であり、その意味で、作品の露出が豊富になってきた現在は選択肢が増えているのだろう。

### 既存の貸美術館の現状と Gates Museum の機能